



2023.4.18

Euroluca 2023 サイトスペシフィック・インスタレーション
YOU CAN IMAGINE THE OPPOSITE (反対を想像する)
Maurizio Nannucci (マウリツィオ・ナンヌッチ)
4月18日～23日、ホール9

Maurizio Nannucci (マウリツィオ・ナンヌッチ)は、「別の現実を構築するための衝動」となるような記憶に刻まれる象徴的なフレーズを発信しています。光や色とともに、常に彼の研究の中心であり、学校の教科書にも載っているような言葉たちです。1960年代半ば、軽快な「Olivetti Lettera 22」で最初のダクティログラム(Dattilogramma:活字)を発表、最高の具象詩と最も精巧な図形構成の研究から、文字や言葉を繰り返し打ち、ミリ単位の注意を払ってキーを叩き重ね合わせて活字を作り出しました。

エビデンスと逆説が混在する中、彼は指で水に書き始め、儂く謎めいた創造性を発揮しました。「Quasi infinito (ほぼ無限)」(1975)では、時計の数字を12の文字に置き換えて、時間の拡張の可能性を夢想させてくれました。

また、1978年のヴェネツィア・ビエンナーレ展では、ラグーンに「イマージュ・デュ・シエル(空のイメージ)」の旗を小型飛行機で掲げ、空に向かって目を上げた観客が見たであろうものを「キャプション」として綴ったこともありました。そして何よりも、彼が色とりどりのネオンの光り輝く看板を通して、形と意味の間にある考えや公理を書いたときから、その適切に湾曲したガラス管の中に、永続的に力を持つ宣言を封じ込めました:「*Changing place, changing time, changing thoughts, changing future, New times for other ideas, Something happened...* (場所を変え、時間を変え、考えを変え、未来を変え、他の考えのための新しい時代、何かが起こった..)」などのように、作品がフレーズとなり、鑑賞者に読ませるような作品ばかりです。

正に「You can imagine the opposite(反対を想像する)」という力強い励ましの言葉のように、「正反対」を考えるように促すのです。なぜなら、Bruno Munari (ブルーノ・ムナーリ)が「But can't it be done another way?(しかし、別の方法はないのだろうか?)」というマントラで示唆したように、常に別の可能性があるからなのです。そして、マウリツィオ・ナンヌッチ自身が作品「Everything might be different (何もかも違うかも知れない)」に大文字で記し封印したように。

プレスお問い合わせ先: 山本幸 yuki@milanosalone.com

International press info: Marva Griffin-Patrizia Malfatti press@salonemilano.it